

京都ノートルダム女子大学 学術情報センター図書館



京都ノートルダム女子大学学術情報センター職員の方々の写真。

大学生活にキリスト教が深く根ざす

京都ノートルダム女子大学の母体であるノートルダム教育修道女会は、1833年にドイツのバイエルン地方でマリア・テレジア・ゲルハルディングにより、女子教育を目的に創立されました。1948年に4人の米国人修道女が来日し、京都・洛東の地にノートルダム女学院中学校、高等学校を、洛北に小学校を設立しました。その基盤の上に、1961年、現在の地にノートルダム女子大学が創立されました。開学時は英語英文学科、次いで生活文化学科を開設。1999年に京都ノートルダム女子大学と改称し、2000年に人間文化学科、生活福祉文化学科、生涯発達心理学科を開設しました。2005年度には生涯発達心理学科が心理学部心理学科として独立、人間文化学部との2学部で改組されます。

大学名の「ノートルダム」は、フランス語で聖母マリアを意味する言葉です。学生の集うところにはマリア像があります。廊下や教室の壁には十字架が掲げられ、入学式や卒業式ではミサが行われるなど、大学生活の中にキリスト教が深く根ざしています。「宗教教育というよりも、宗教の精神の精華——宗教のもたらした思想や、マナーやモラルなどを伝えることを重視しています」と山本美明事務室長はおっしゃいます。なかでも「挨拶から始まる人間関係」を大切にしており、学生と教員、学

生と職員が互いに挨拶を交わす姿が印象的です。

オープンな図書館

図書館の入り口はソフィア館2階にあります。ソフィアとは「知恵・英知」を意味するギリシャ語です。同じ校舎内にはマルチメディア演習室・視聴室もあります。教室やラウンジなど、学生がほとんどの時間を過ごすユーニア館とは、渡り廊下で繋がっています。図書館内にも、十字

架やキリスト教に縁のある絵などが掲げられ、穏やかで柔らかな空気が漂います。

図書館事務室は、オープンカウンターの開放的な作りで、図書館に出入りする学生の様子が手に取るようにわかります。「その代わり、事務室内の声が館内にも響くので、気を使う面もありますが」（寺田由紀子さん）。来館者の中には就職活動や卒業論文の作成などで追い詰められた気持ちでやってくる学生も少なくないので、「仕事は忙しくても、余裕のある振りをして」少しでも学生がゆっくりと過ごせるように、心がけているそうです。

大学の改組に伴い資料の需要も変化

京都ノートルダム女子大学は、開学以来外国人教員が多く、英語の習得は重要視されていたので、蔵書の大半が洋書でした。学生には「英語をたくさん読む」ことが求められていたため、英米文学をはじめとする海外の文献を重点的に揃えていたそうです。しかし、学科の増設により次

第に日本語の資料が増え、現在は和書と洋書の割合が6対4と逆転しています。また従来は日本語の資料でも、小説や文学批評、言語学の書籍が多かったのですが、大学で扱う分野の拡大に伴って資料の需要も多様化してきました。

新たに増設された心理学や福祉の分野では、情報の変化が激しいので、資料は雑誌や論文が中心です。授業でも、論文を読んでレポートをまとめたり発表する課題が出るので、学生も雑誌を見たりインターネットで論文を検索する必要があります。「昔は本を借りて帰る学生ばかりだったのですが、今は、自分で検索しているいろいろ質問したり、論文の複写を依頼したりするようになりました」（谷愛子さん）。

NACSIS-ILLに参加してからは、文献複写の依頼や受付の件数も、毎年倍増しています。

大学の授業やゼミの中で 利用教育を実施

京都ノートルダム女子大学の1年生は、コンピューターを道具として使いこなすためのリテラシー教育が全員必修です。その授業の1コマを図書館の利用教育にあてて、資料を調べるためのツール——OPACやWebcat、雑誌記事索引の紹介と検索の実習を行っています。最初は図書館職員が交代で担当していましたが、今年から、コンピューターを教えている講師が担当しています。教材は図書館で作成し、講師のためのマニュアルも用意しました。授業の後には簡単な練習問題とアンケートを実施し、学生の理解度をチェックしています。練習問題に不正解が多いときは、「ここは間違えやすいので気をつ



実り豊かな大学生生活をサポート

京都・洛北の閑静な住宅地では、北山の緑に京都ノートルダム女子大学の十字架が溶け込んでいます。大学生生活にキリスト教が深く溶けこむように、京都ノートルダム女子大学学術情報センター図書館も、それぞれの大学生生活に深く溶け込み、豊かな実りをもたらしています。



ケルト三大写本をはじめとするキリスト教関係の美しい資料

図書館では、キリスト教に縁のある資料を多く所蔵しています。中には、ケルト三大写本の複製版など、歴史的にも価値のある装丁や挿画の美しい資料もあります。

けてください」と注意を促すよう、講師に依頼することもあります。

3年生に対しては、ゼミ別オリエンテーションを実施しています。ゼミのテーマと担当教員の希望を考慮して内容を検討し、ゼミの時間内に図書館職員が説明を行います。担当する教員によって、インターネットを使った雑誌論文の調査を詳しく、あるいは館内の文献検索を中心に、などと要望が異なるので、説明する内容も変えています。ゼミ別オリエンテーションを、2004年度は

31回実施し合計234人が受講しました。

これらのオリエンテーションを通じて、学生はどのようなテーマに取り組んでいてどのような情報が必要なのか、何ができなくて困っているのかを把握でき、資料の選定やレファレンス業務に反映させていくことができます。「コンピューターを使えることと検索ができることは別なのですね」（嶋本典子さん）。コンピューターに習熟した学生ほど「聞かなくても大丈夫」と思って質問しないので、そういう学生の様子も事前に察して、指導するようにしています。

学生のアンケートには、オリエンテーションを受講して図書館の便利なツールやデータベースを知り、文献検索ができるようになったといった回答もあり、教育の成果に十分な手ごたえを感じています。



卒業生や家族の利用も

学外者の利用は、所属する大学や公共図書館の紹介状を持った来館者の館内閲覧に限っていますが、卒業生やノートルダム女学院の在校生とその家族などの関係者には利用者カードを発行し、貸し出しを含めたサービスを行っています。

また、図書館では電話やファクシミリ、電子メールによる所蔵確認や郵送貸出など、

遠隔地利用に対するサービスも行っています。これらのサービスは在学生や教職員も利用できますが、郵送貸出は往復の送料を利用者が負担するので、なかなか来館できない卒業生の利用が中心です。

学術情報センターとしての図書館の使命

図書館では比較的早い時期から情報化に取り組み、図書館カウンターでノートパソコンの貸し出しを始めたのは、2001年のことです。2004年には閲覧室に無線LANも設置され、ノートパソコンでもインターネットに自由に接続できるようになりました。

「次は電子図書館的な機能を充実させていきたいと思っています」と嶋本さんはおっしゃいます。「他の図書館も同様に考えていると思いますが、図書館で扱う資料は、情報技術を利用して、どこからでも使えるようにしていきたい」と山本室長。そのために、情報部門を併せた学術情報センターという形で、大学全体として情報の流動化を推進しています。「その中で、図書館としての使命を果たしていきたいと思っています」（山本室長）。

■この記事は2004年12月10日の取材に基づいています。



図書館プロフィール

LIMEDIO導入:2000年10月

ユーザー数	奉仕対象	1,988人
	図書館職員	6人
データ	蔵書数(図書)	157,193冊
	蔵書数(雑誌)	4,015種
	年間受入数(図書)	5,156冊
	年間受入数(雑誌)	1,593種
	一人当たり年間貸出冊数	7.5冊
開架図書率		98.9%

2004年3月31日現在のデータ

システム構成

業務DBサーバー	1式
検索DBサーバー	1式
アプリケーションサーバー	1式
業務用端末	14台
業務用プリンター	3台
利用者検索用端末	10台
利用者用プリンター	1台